

「ねえ～、お願いよ～。ちょっとだけでいいの！見せてよぉ～」
「ダーメッ！あれはヤンのモノなの。つまり！ヴァリエール家のモノでもあるってことなのよ」

魔法学院の夕方、乗馬の練習から戻ったルイズ達の部屋の前で、珍しくキュルケが頭を下げていた。頭を下げられるルイズはまんざらでも無いようで、誇らしげに胸を張りつつキュルケのお願いを突っぱねている。

「そこをなんとか、ね！お願いっ！」
キュルケはもう、手を合わせてルイズに頭をへこへこ下げている。
「もうっ、いい加減にしてよね！あれの価値がどんなものか知ってれば、簡単に見せれないモノだってわかるでしょ！？第一あれは、ここにはないわ。危ないから宝物庫の中よ。分かったら諦めて、さぁ部屋に帰りなさいな！」
扉前でルイズにお願いしていたキュルケは、ネコみたいに追っ払われた。随分と色気過剰な大ネコだが、
ボタンと扉を閉めて、床にあぐらをかいて本を読んでいるヤンに不機嫌に怒鳴る。
「あんたも本ばっか読んでないで、アレの削り方くらい考えなさいよ！」
ヤンは一言、ノンビリと答える。
「無理だよ」
飄々としたヤンの、さも当然というような返答に、ルイズはイライラしてくる。
「無理だよ、じゃないわよ！あんなでっかいダイヤ、高すぎてだーれも買えないわ！ていうか、本体からも外せないじゃないの！」
「といっても、ハルケギニアの技術レベルでは、傷一つつけられないよ、『錬金』でもかけたらどうかな」
「それじゃ、価値が無くなるじゃない！あの斧本体もダイヤも、どっちも凄い値段が付く事間違いなしなんだから！」

第4話 土くれのフーケ

ローゼンリッターのトマホーク、その刃である巨大ダイヤモンド。そしてロングビルに正座させられ説教された学院長とコルベール。

研究室が崩れんばかりの大音響と共に、当然これらの事実も学院中に響き渡った。そして学院長はじめ教員が束になっても傷一つつけられないという、斧それ自体が驚異的な硬度を誇る未知の物質で作られている事も。

ロングビルから「高値で売れる」と言われた事を、ルイズは自分の事のように喜んだ。実際、ヤンは自分の治療費をちゃんと返すつもりだったので、それは自分の事として喜んで間違いはない。

だがヤンもルイズも、すぐに気がついた。その斧を売る事が出来ないという事実に。

価値が高すぎるのだ。

神話級の巨大さを誇るダイヤモンドを刃とした、何者をもってしても破壊出来ない斧。これはつまり、「加工出来ない」という意味でもある。その斧は丸々一つでしか売買できない。なので、それは途方もない金が動くという事。

有力貴族ではあるが一介の学生でしかないルイズ。異邦人のヤン。もはや彼等が扱える金額では、なかった。

おまけに斧という形状も問題だ。

ハルケギニアは魔法世界。支配階級の貴族はメイジであり、杖がその象徴。剣や斧は平民の武器だ。至高の価値を持つ宝石が斧の形をしていては、購入する貴族や王族にしてみると、よろしくない。女性の装飾品としては最悪のデザインとしかいいようがない。

でも加工できないほど硬い物質な上に、刃だけを本体から取り外す事も出来ない。形状も変えられない。

だからといって、本来の使い方である「トマホーク」として、新たに柄を取り付けて使用するなど、少なくともハルケギニアの人間であるルイズからしてみたら、あり得ない話だ。杖として使用するには大きくて重すぎる。

かくして、ヤンもルイズも斧の取り扱いに困り果ててしまった。でも、あまりに価値が高すぎて部屋に置いておくのも危ない。なので、とりあえず学院の宝物庫に保管する事となった。

保管するのはいいのだが、ルイズは気が気ではない、顎に手をあてながら室内をウロウロと歩き回ってしまう。

「大丈夫かしらねえ、またあのハゲやエロジーサンが勝手に持ち出したりしていないかしら？」

有力貴族出身のルイズは、もちろん仕送りの量もハンパではない。だからこそ屋敷が買えるほどのヤンの治療費を支払えた。そのルイズをもってしても、斧の価値は動揺させられるに十分なものだった。

「うーん、大丈夫じゃないかな？斧をおさめたケースの鍵はロングビルさんが管理してるから」

ヤンの言葉にルイズはキョトンとしてしまう。

「ロングビルって、あの秘書の人？ちょっと、大丈夫なの？あの斧盗られちゃうんじゃない？」

「盗むつもりなら、この前学院長の机の上で見つけた時に盗んでるさ、少なくとも、あの斧の存在を僕に教えても、彼女に利益はないよ、それに、宝物庫に入るには学院長の許可がいるし」

「ああ、それもそうね...少なくとも、どこかのハゲみたいにぶっ壊そうとはしないでしょうね」

納得して頷くルイズ。

ヤンは相変わらず焦燥とか不安とかとは無縁かのように、床に置いたお茶を飲む。とたんに不快と縁が出来た。

「うう、やっぱり不味い。明日はシエスタさんにお茶の入れ方を習うとするよ」

「そうしなさい、ともかくこっちは、あの斧について父さまに手紙を書いてみるわ。出入りの宝石商を紹介してもらおうから」

「あ、それなんだけど」

ヤンは何か思いついたようで、慌ててお茶を床に置く。

「宝石として売れないなら、それ以外として売れないかな？」

「宝石以外？」

...まさか、あれを斧として使えっていうの！？冗談言わないで！あんたの国ではただの斧なのかも知れないけど、このハルケギニアじゃ、あんなでっかいダイヤ！もったいなくて平民になんか渡せないわ！」

肩を震わせて抗議するルイズにヤンは、まあまあ話を聞いて、とんだめる。

「つまり、武器以外の実用品として使えば良いんだよ。例えば、カッターとか、研磨用の研ぎ石としてとか、僕の世界ではダイヤモンドカッターと呼ばれているんだけど、ハルケギニアにもそういうのはあるかな？」

ヤンのアイデアを聞いて、ルイズは首を傾げる。そして、ポンッと手を打とうとしたが、すぐまた考え始める。

しばし顎に指をあてウーンと考えて、諦めたように溜息とともに肩を落とした。

「しょうがない・・・気はすすまないけど、アカデミーの姉さまにも連絡するわ」

「へえ～、それじゃあ、アカデミーに売るつもりなんですか？」

次の日の午前、厨房でシエスタがテーブルにティーカップやお茶の葉を持ってくる。

「うーん、まだ分からないよ、でも、宝石として使えないなら工具としてどうか、と思っ
てね」

ヤンはかまどでお湯を沸かしている。

慣れない手つきでかまどに薪をくべ、お湯の沸き具合とにらめっこしていた。

「えっと、ねえシエスタさん、お湯はこれくらいでいいのかな？」

お湯は沸騰し始め、泡が沸きだしている。

「いえ、もう少し沸かさないと、お茶は湯の温度が命だから、気をつけてね、それじゃ、こちらのポットに茶葉を入れてみて」

ヤンは茶壺からお茶の葉を無造作に取り出し、ポットに入れようとする。

シエスタの手が彼の手をベチッとはたいた。

「ああ、ダメダメ！二人分だけのお茶なんですから、ちゃんと二人分だけの分量を取らないと、濃すぎたり薄すぎたりしますよ、

で、次は茶葉を入れたポットに完全に沸騰して泡がごぼごぼ立っている状態の湯を素早く注ぎます。カップは一般的に、予め暖めておくように、と言われてるわ、でも猫舌な人も居ますので、それは人それぞれかもしれないわね」

「そうなのかあ、それじゃミス・ヴァリエールの好みも聞いておかないとな」

そんな感じで、ヤンは慣れない手つきでお茶の入れ方をシエスタから教わっていた。

朝食の片付けも終わり、昼食準備までの休憩時間、厨房に若い女性と二人っきりでお茶の入れ方など、色々教えてもらう。ヤンは内心、こんな姿をポプランやシェーンコップに見られたら、なんてからかわれるだろうかと苦笑いをしてしまう。

いつ来るかも、本当に来るかどうか分からない自分の捜索隊、そのメンバーにアッテンボローなどイゼルローン的高級士官達が混じっていないことを、贅沢と知りつつも祈ってしまうのだった。

そんな邪な願いを抱きつつ、シエスタ直伝のお茶がティーカップ二つにいれられた。二人で口にしたそのお茶は、ヤンの贅沢な願いに影響されたかどうかは知らないが、少しはましになったと言う程度。やっぱり不味かった。

「う～ん、僕には才能がないみたいだね」

「そんな事はありませんよ！最初よりはずっとマシになってます。練習すれば、必ず美味しいお茶が入れますよ」

不味いお茶を飲まされたはずのシエスタが朗らかに励ましてくれるので、ヤンも嬉しいやら恥ずかしいやら。照れ隠しに頭をかいてしまう。

「そうだね、頑張るとするよ。洗濯とか掃除とかも、色々勉強しないとね」

「ええ！私で良ければ色々教えますので、一緒に頑張りましょうね」

黒髪とソパカスが魅力的な少女の、小さくても元気なガッツポーズ。

軍で海千山千な敵味方と、騙し合い裏の読み合い殺しあいをしてきたヤン。彼にとり、まるで青春時代に戻ったかのような錯覚に陥らせるに十分なものだ。いや、彼の青春時代に女気は無かったので、30代にして初めての青春時代か。

「助けが来るかどうか分からないけど、しばらくここでやっていくな」

ハルケギニアの良さに気付くつあるヤンだった。

その日のお昼休み、学院の宝物庫。

トリステイン魔法学院の宝物庫は本塔学院長室のすぐ下にある。学院秘蔵の秘宝からガラクタまで保管された巨大鉄扉の鍵は、オールド・オスマンが管理している。

その扉は今は開けられ、ロングビルと何人もの教師が中で一つのケースを囲んでいた。

長い黒髪に漆黒のローブをまとった、陰鬱な空気を漂わす若い男が、うわごとのように囁いた。

「これが、例の…斧か」

紫のローブをまとった中年女性、先日ルイズの失敗魔法で吹き飛ばされたミセス・シュブルーズが斧の刃に杖を向ける。

「本当に、間違いなく、これはダイヤモンドですわ。…いえ、待って下さい。これは…凄いですわよ！ダイヤよりもずっと衝撃に強くて、確かにこれなら武器としても使用出来ますわ！」

周囲から、ダイヤよりも硬いと言うのか！？信じられない、といった嘆息が漏れる。

他の教師達も魅入られたように斧を魔法で調べ、強度を確かめ、ダイヤ部分を外せないか格闘してみる。だが、得られるものは無かった。オスマン達と同じく、恐ろしく硬いという以外は何も分からない。

ロングビルがパンパンと手を打って皆の注意を引く。

「さぁ皆様、お昼休みはもうすぐ終わりますわ。そろそろ宝物庫を閉めますので、皆さん出て下さいな」

教員達は渋々といった感じで宝物庫を出て行く。だが斧のケースに鍵をかけたロングビルが出てこないのにシュブルーズが気がついた。

「ミス・ロングビルはでませんの？」

「ええ、私は宝物庫の目録を作ろうと思えますの。せっかく宝物庫に来ましたので、ついでにやっておきますわ」

秘書は教師達が皆立ち去るのを見送ると、宝物庫の扉を閉める。

窓もない、暗い宝物庫の中を魔法の光で照らす。誰もいない室内に、なんだかよく分からない秘宝だかガラクタだかがずらりと並んでいる。

それらを横目に、彼女は一つの大きなケースの前に来た。パカッと開けると、そこには金属製の筒のような壺のようなものが収められている。高さは1メートルくらい。ケースには筒の名称が貼られている。

名札を読むロングビルは、明らかに邪気を含む笑みを浮かべた。

「くふふ…これが学院秘蔵の、『破壊の壺』てわけかい」

口の端を釣り上げながら魔法の光を近づけ、表面に描かれた文様を見つめる。

「ふう～む、読めないわ。どこの国のモノかしらねえ？」

ふと視線を横に向けて、ローゼンリッターの斧を収めたケースがある。

彼女の脳裏に、遙か異国から来た冴えない男性の姿が浮かぶ。そして彼の服や持ち物に記されていた文字らしきものも、

記憶の中の文字と目の前の『破壊の壺』に記された文字を照らし合わせてみる。

「・・・もしかしたら、あいつなら読めるんじゃない・・・」

次は宝物庫を守る壁を調べてまわる。

試しに壁に『錬金』をかけてみるが、何の変化もない。

軽く杖で叩いてみると、硬質な音が返ってくる。そして手で直接壁に触れ、壁の厚みや材質を読み取っていく。

「こりゃ、ダメだわ。『固定化』以外はかかってないけど、あたしのゴーレムでぶん殴っても破れないほどの強度だわね。どっかに傷とかヒビとかあれば、なんとかかなりそうなんだけど・・・もちろん、ないわね」
ロングビルはぐるりと宝物庫を見渡し、肩を落とした。

そして紙とペンを取り出し、今度は本当に宝物庫の目録を作り始めた。
だがその口からは、書き連ねている宝物の目録とは別の言葉が漏れてくる。

「学院秘蔵の秘宝『破壊の壺』、欲しいねえ…。でも、あたしのゴーレムで力づくっていうのは無理か、今すぐってのもありだけど、それじゃ『あたしが犯人です』って言ってるようなもんだし。まあ、中に入る口実も手に入れたし、夜には当直の教師も寝ちまうんだし、焦る事はないわ。じっくり盗み方を考えましようかね。
それにしても惜しいわ。マジックアイテムじゃないけど、ヤンの斧の方が値打ちがありそうなんだから。はぁ～もったいない。あいつが貴族だったら、遠慮無く頂いたんだけどねえ～・・・」

ふと彼女の頭にヤンの顔が浮かぶ。高級軍人にもかかわらず、何の裏も持ち合わせていないかのような、のんきで穏やかな…というか、寝起きのように気が抜けた顔が。
ふと、自分の顔も同じように気が抜けてしまっている事に気がついた。
慌てて頭を左右に振りまくる。

その時、背後から扉が開く音がした。
彼女は更に慌てて、目録作成を真面目にしていた風を繕う。
「ミス・ロングビルかの？」
扉を開けたのはオスマンだった。
「あら、オールド・オスマン。どうされましたか？」
「いや、昼休みが終わったのに戻ってこんから、どうしたのかと思っの」
言いながらオスマンはロングビルに歩み寄る。
「心配させて申し訳ありません。実は宝物庫の目録を作っていました」
「おお、そうかのそうかの。相変わらず仕事熱心じゃな！」
「そして、学院長は、相変わらずスケベですわね！！」

秘書の尻をなでたオスマンは、ヒールで思いっきり蹴り飛ばされた。

その日の夜、ルイズの部屋に一通の手紙が届けられた。
ヤンが受け取った手紙の差出人を見ると、ルイズは驚いて大声を上げてしまった。
「うわっ！？父さまから、もう返事が来たわよ！今朝出したばかりなのに早いわね」
「へえ～。公爵ともなれば仕事が忙しいはずなのになぁ。よほど君から手紙が来たのが嬉しかったんだろうね」
急いで封を開けて中を読むルイズは、さらに驚いて目を丸くしてしまった。
「えー！どうしてこうなるのぉ？明日の夕方、王宮に例の物を持って来なさいって！」
二人は顔を見合わせた

ダエグの曜日、放課後。
学院の正門に立つルイズとヤンの前に、王宮からの迎いの馬車が一台やって来ていた。
そして二人の後ろには、斧を収めたケースを持つロングビルもいる。
「ありがとうございます、ミス・ロングビル。それじゃ持って行きますね」
ヤンがロングビルの持つケースに手を伸ばすが、彼女は彼の手を拒んだ。
「いえいえ、これは成り行きとはいえ、私が鍵を預かり守っている物ですから。ちゃんと王宮までお守りしますわ」
それを聞いたルイズが怪訝な顔をする。
「あの、ミス・ロングビル。あなたには秘書の仕事もありますし…」
やんわりと断ろうとするルイズを、毅然とした秘書はビシッと右手で制した。
「申し訳ありませんが、この斧の価値は宝石としても研究素材としても極めて高い物なのです。あのエロオ…ごほん！もとい、オスマン氏とミスタ・コルペールの例もあります。最近『土くれのフーケ』が出没していることですし、ちゃんと王宮までお守りしますわ」
ルイズとヤンは何となく納得いかないようではあるが、斧の価値に比べて確かに馬車一台だけでは不安を感じる。なのでロングビルの同行を認める事にした。

馬車は夕暮れの草原を通り、トリスタニアへと向かう。
初めて街に行くヤンは、見るからにワクワクしているのがわかる。ずっと窓から馬車の進行方向を見つめ続けている。横に座るルイズは、そんなヤンを「みっともないわよ、落ち着きなさい」とたしなめるが、あんまり効果がない。
彼等の前に座るロングビルは、ケースを膝に載せて静かに座っている。

「ねえ、ミス・ヴァリエール、日没までに街に着くのかい？...おっと、こほん」
浮かれすぎて目の前にロングビルが居るのに敬語を使うのを忘れた事に気がついた。慌てて咳払いして言い直そうとするヤんに、ロングビルは少し微笑んだ。
「お二人の事情は大体知っていますわ。私の前では気を使わずともよろしいですよ」
言われたヤンは少し恐縮してしまう。ルイズは伏し目がちになってしまう。

誤魔化すようにヤンがロングビルに尋ねた。
「ところで、さっき言っていた『土くれのフーク』とは何なんですか？」
「そうですね、城まで時間がありますし、お話ししましょうか」
ロングビル、そしてルイズは、トリステイン中の貴族を恐怖に陥れる怪盗について説明した。

『土くれのフーク』
近年トリステインを騒がす神出鬼没の大怪盗。
土系トライアングルクラスのメイジらしく、『固定化』された壁や金庫を『錬金』で土に変えてしまう。また、30マイルの土ゴーレムも操り白昼堂々王立銀行を襲う。かと思えば夜陰に乗じて鮮やかにお宝を盗みさることもある。
性別すら分からず、行動パターンも読めず、魔法衛士隊も振り回されている。
そして犯行現場には必ず『秘蔵の　、確かに領収いたしました。土くれのフーク』とふざけたサインを残す。
狙うのは貴族が所有する、強力な魔法が付与されたマジックアイテムがメイン。

「マジックアイテムを狙うと言う事は、その斧は狙わないのでは？それに私は貴族ではありませんよ」
と疑問を口にしたヤんに、ルイズが呆れた顔を向けた。
「バッカねえ、魔力は込められて無くて、桁外れの価値が込められてるわ、これだけの品なら十分狙うでしょ。それにあんたはあたしの使い魔、つまり貴族同然と見なされるかもね」
ルイズの意見にロングビルも頷く。
「念には念を入れるべきですわ。私では少々役者不足ではありますが、必ずやお二人と斧を王宮に届けますわね」
自身を持って胸を張るロングビルに、ヤンは頼もしさを感じてしまう。

そんな話をしていると、薄暗くなった草原の向こうにトリスタニアの街灯りが見えてきた。

ヤンは、人生の多くを宇宙で過ごした。
少年時代は16歳直前まで父と共に恒星間商船に乗って星々を巡った。
士官学校時代や、軍での地上勤務もあった。だが、同盟と帝国の戦争は大方が宇宙空間での艦隊戦なので、艦に乗って宇宙を渡る時期が長い。そして「イゼルローン要塞司令官・兼・イゼルローン駐留艦隊司令官・同盟軍最高幕僚会議議員」という地位でイゼルローン要塞へ赴任、何度か同要塞を奪取もした。
つまり、彼は惑星上で生活した期間が長くない、ましてや、ペット以外の生物が人間と共に暮らす中世の街なんて、本でくらいしかお目にかからない。彼は宇宙で科学に包まれて生きてきたのだから。
なので、彼がこんな姿を見せても、やむを得ない事なのだろう。

「うわぁ～！すごいなあ、松明だよ！本当に火を燃やして灯りにしてるんだね！全部魔法で照らしてるのかと思ったよ。おや、あそこに見えるのは、ロバだ！すごい、こんな街中にロバがいるなんて！おお、あれは！荷車を、人が引っ張ってる！荷物は...見た事のない野菜だ、しかも、土がついたままだ！それにしても、なんて細い街路なんだ、ああそうか、城へ敵が直進出来ないよう、細く曲がりくねらせ迷宮化させてるんだねえ。あらら、道ばたに落ちてるのは、馬のフンかい？ははは、そうだね、動物がいれば当然だよ。それにしても臭いがきついな、衛生状態はお世辞にも良いとはいえないようだね」

白い石造りの城下町トリスタニアに入ったとたん、ヤンは子供のように馬車の窓にかじりついて興奮しっぱなしだ。なにしろ彼にとっては多くの歴史書に記された古代地球の風景が、テーマパークとは違う本物の中世の町並みが目の前に広がっているのだから。歴史家志望だったヤンにとっては、もう天国のような世界なことだろう。

翻って見るに同乗者の女性2名は、どちらかという地獄だろう。いい年をした大の男が子供のようにはしゃいでいる。しかも、自分たちには見慣れた、というか、どこが面白いのか全く分からない物を見て大喜びしているのだから。

馬車の前からも押し殺したような笑い声が耳に届く。御者が必死に笑いをこらえているらしい。

ルイズが肘でヤンをつつく。

「ちょっと、あんた…恥ずかしいのよ！落ち着きなさいっ！」

突かれたヤンは、ようやく我に返った。

「あ、ああ、ゴメン。興奮しすぎたね、気をつけ・・・うわっ！信じられない！あれは毛皮屋さんかい！？初めて見たよ、動物の皮を、えと、なめすっていうのかな？へえ～！あんな風にやるんだねえ」

我に返ったとたんに、すぐに道沿いの商店に目移る。今しがたルイズに言われた事も忘れて馬車の窓から身を乗り出そうとする。

ごすっ

ルイズの足が、ヤンの足をカ一杯踏んづけた。

声もなく踏まれた足を押さえて悶えるヤンに、ロングビルもクスクスと笑ってしまう。

大通りのブルドンネ街を通り、橋を渡り、大邸宅の間を抜け、大きな城門をくぐって馬車はトリステイン城に到着。

ルイズとヤンとケースを手にしたロングビルは城内の一室へ案内された。

王宮の名に恥じない豪華な部屋の中には二人の人物、初老の男性と20代の女性が椅子に座っていた。

「おお、ルイズや、久しぶりだね」

「父さま！お元気そうで安心しましたわ！」

そうやってルイズは父に駆け寄り頬にキスをした。

「それにしても、どうして王宮ですの？別邸がありますのに」

「実は王宮で用があってね、そのついでなのだよ」

ルイズにキスをされているのはヴァリエール公爵。50過ぎで白髪交じりのブロンドと口ひげ、左目にはグラスをはめた、眼光鋭い初老の男性だ。王族もかくやとうならせる豪華な衣装を身につけている、ルイズの父。

「それと…その、お久しぶりです、姉さま」

そしてもう一人は、美しいブロンドの長い髪をもった長身の女性。ルイズの気の強い部分を煮詰めて濃縮させて熟成したら、こんな風だろうかという感じだ。メガネの向こうから睨み付ける視線が、ルイズを萎縮させている。

「お久しぶりね、おちび。それでは、例の物を見せてくれるかしら？」

いきなり本題に入られたルイズは、既に怯えて縮こまっている。

「あ、あの姉さま…再会のキスくらい…」

「不要よ。私はアカデミーの主席研究員として忙しいの。その私をわざわざ呼びつけてまで売りつけたい物ですって？どんな物が楽しみだわ、さっそく見せなさい」

「こらこら、エレオノール、そう慌てなくても・・・」

諫める公爵をエレオノールはキッと睨みつける。

ギスギスとした雰囲気ルイズもタジタジ、扉で控えるヤンとロングビルは視線を合わせて肩をすくめてしまう。

「その平民！」

いきなり平民と呼ばれ、一瞬ヤンは自分の事だとは分からなかった。

「随分と変わった格好をしているようですが、あなたがルイズが召喚したとか言う異国の平民かしらね？」

ちなみにヤンの格好は、同盟の軍服、白い五稜星マークが入った黒のベレー帽、襟元にアイボリー・ホワイトのスカーフを押し込んだ黒のジャンパー。そしてスカーフと同色のスラックスに黒い短靴。

同盟では当たり前前の軍服だが、もちろんハルケギニアでは全く見ない服装だ。

「はい、ヤン・ウェンリーと申します。ヴァリエール家長女、エレオノール様ですね、お初にお目にかかります」

恭しく頭を下げるヤンだったがエレオノールはフンッと、下らぬ物を見るかのようにヤンを見下ろしただけだ。

いくら平民相手とはいえ礼を失する態度に、横で見ていたロングビルも眉をひそめる。だがヤンの視線に促され、特に何も言わず淡々とケースをデスクの上に置き、斧を取り出した。

とたんに、公爵もエレオノールも溜め息がもれる。視線は刃のダイヤモンドに注がれたまま動かない。

「それでは、確かに斧はお渡ししました。これで失礼します」

と言ってロングビルは背を向けた。

扉に手をかける秘書にヤンが声をかける。

「ミス・ロングビル、もう帰るんですか？こんな夜中に駅馬車はありませんよ」

「ご心配なく。街の馴染みの宿で一泊して、朝一番の馬車で学院に戻りますわ」

そう言って彼女は部屋をあとにした。

部屋にはルイズとヤンと、手に取った斧を凝視する二人が残された。

二人は学院で教員達が行ったように、斧の材質を確かめ、強度を調べ、ダイヤの刃を外せないかと思いつく方法と魔法をあこれ試す。

もちろん「どうしようもないほど頑丈」という結論に至った。

エレオノールは公爵が手に持つ斧の刃に魅入られている

「素晴らしいわ...アカデミーに持ち帰り、必ずや刃を本体から外してみせますわ！」

斧を光にかざしながら公爵も満足げに頷いた。

「うむ！頼んだぞ、エレオノール、これほどのダイヤがあれば、姫殿下の婚儀には目もくらむばかりの宝飾品がウェディングドレスを飾り、ヴァリエールの名を世へ知らしめられよう！」

姫殿下の婚儀と聞いてルイズは驚いて、えっ！？と声を上げてしまう。

仰天して目を丸くするルイズを見た公爵が、咳払いをして話し出す。

「そうか、まだルイズは知らなかったか、実は姫殿下はゲルマニアのアルブレヒト三世の下へ嫁がれる事になったのだよ」

「ゲルマニアですって！？」

さらに驚き口も目も丸くしてしまう。

「何故ですか！？何故にあのような成り上がり共の国にっ！」

「ゲルマニアとの同盟を結ぶためですよ」

いきなり扉から声がした。

そこには豪華なドレスをまとい宝冠を頭にのせた、ふくよかな女性が立っていた。

「失礼。何度もノックをしたのですが、返事が無かったので、勝手ながら入らせてもらいましたわ」

「これはこれはマリアンヌ様、陛下の来室に気付かず、失礼致しました」

そういって公爵はマリアンヌの前に跪いた。エレオノールもルイズも恭しく跪く。なのでヤンも彼等の後ろに下がり跪いた。

マリアンヌは頷き、皆を起立させる。

共を連れたマリアンヌは室内に入ると、やはり斧へ目が向いた。

「ほほう...これが噂の...なるほど、これなら、未だかつて類を見ないほどのティアラや首飾りやらが作れましょう」

公爵も自慢げに斧をマリアンヌへ手渡す。

「はは、さすがは陛下、お耳が早うございますな、いやはや、婚儀の日まで秘密にし、陛下と姫殿下を驚嘆させかけたのですが」

「ほほほ、それは嬉しい謀でしたこと。ですが、これ程の巨大なダイヤを持つ平民が、使い魔として召喚されたとなれば、噂が疾風の如く駆けめぐりのも仕方ない事、いやでも話は聞き及びますわ」

女王も満足げにダイヤの刃を光にかざし見る。

そして公爵の後ろ、ヤンの方へ目が向く。

「そして、件の異国から召喚された平民使い魔か、これ、名をなんという？いずこから参られた？」

慌ててエレオノールが間に入るうとした。

「へ、陛下！卑しき平民に自ら声をかけるなど」

だがマリアンヌはエレオノールの言葉を手で制した。

「かのアルピオンにおける内戦、反乱軍レコン・キスタの勝利が揺るがぬものとなりました。今、ゲルマニアとの軍事同盟はトリストイン防衛のために避けられぬのです。そのため娘も、アンリエッタもゲルマニアへ嫁ぐのですよ。成り上がりの国でも、力はあるのです。かの国では平民でも貴族になれます。そのため今、姫はマザリーニと共にゲルマニアへ赴いています。

ならば私も、魔法の使いぬ平民だからと人を蔑むわけにはいきません」

その言葉にエレオノールも公爵も、苦虫を噛み潰したような顔をしつつも異議を唱える事は出来なかった。ルイズも、多少は眉をひそめていたが、同時にヤンを認められて嬉しそうにもしている。

ヤンも女王の言葉に満足して名乗った。
「お初にお目にかかります。私はヤン・ウェンリーと申します。自由惑星同盟（フリー・プラネッツ）という国から召喚されました」
「フリー・プラネッツ？聞かぬ名ですね」
王女は首を傾げてしまう。
「ハルケギニアとは交流の全くない、遠い遠い国です。恐らく過去に両世界の人が出会った事すら無いかと思われます」
「そうですか、それは遠い国から参られたものです。ヤン・ウェンリーとやら、そなたのもたらした斧、トリスティンが買い取りましょう。代金は十分な額を公爵へ届けさせるが、良いですか？」
「はい、よろしくお願い致します」
ヤンは、少年時代の父を思い出しながら、商人らしい礼を深々とした。
女王も頷き、公爵へ一礼して部屋を後にした。

「私は早速アカデミーに戻って、この斧から刃を外しにかかりますわ！」
そう言ってエレオノールも部屋を飛び出していった。

後に残った公爵はソファーに深く腰をおろし、まだルイズとヤンが残っているのも構わず大きな溜め息をついた。
「ふう～、どうにかエレオノールの機嫌が直ってよかった。わざわざ王宮に呼び出して気分を変えさせた甲斐があったよ」
その言葉にルイズがキョトンとする。ヤンは最初のカリカリした姉の姿が思い浮かぶ。
公爵は、苦しげに溜め息をつきながら口を開いた。
「実はなあ、エレオノールとパーガンディ伯爵との婚約が破棄されてなあ…」
聞かされたルイズは、本日一番驚いた。目が文字通り白黒している。
「こっ！婚約！？婚約したんですか！？しかも、破棄って…」
「なんでもパーガンディ伯爵が言うには『もう限界』だそうだ…。いや、聞かんでくれ。ルイズ、もうこれ以上は聞かんでくれ・・・」
呻くように呟いた伯爵は、ヤンには一気に10歳老け込んだように見えた。

ひとしきり大きな溜め息をついた後、ようやく伯爵はヤンに目を向けた。
「ともかく、ヤン・ウェンリーとやら、大義であった。
聞いての通りトリスティンから代金が支払われる。だが、額が額なので安易には動かせぬであろう。もし金貨で支払われれば、もはや馬車一台では運べぬ重さになるだろうからな。
支払いは小分けにして、月々渡そうかと思うが、よいか？」
「お言葉ながら、今、まとまった額が必要なのです」
ヤンが深々と公爵へ礼をしながら、現金払いを要求する。
「私が瀕死の状態で召喚されたため、ルイズ様は私の治療費を支払って下さいました。礼を込めて、その倍額を、急ぎルイズ様へ支払いたく思うのです」
その言葉に公爵は納得して大きく頷いた。
「良い心がけだ、ウェンリーとやら。城下の別邸に二人とも来るがよい。十分な金をおいであるので、3倍の額をすぐにお主へ渡すとしよう」
ルイズもヤンも嬉しさを隠しきれない顔を見合わせた。

二人の嬉しい顔は、すぐに驚愕と不安に変わった。
公爵は、さらに老け込んでしまったかのようだ。

3人は城門を馬車で出てほどなく、闇の中にエレオノールの馬車を見つけたのだ。
数台の馬車が粉々に砕かれ、跡形もなく破壊されていた。
周囲には散乱した破片の中に、御者と使用人のメイドと、エレオノールが倒れていた。

そして遙か遠くには、月明かりに照らされた巨大な人型が地響きと共に去っていくのが見える。巨大なゴーレムだ。無論、馬車の破片の中に斧が収められたケースは無かった。

第4話 土くれのフーケ END

[前ページ](#)

[ゼロな提督](#)

[次ページ](#)